

『宗教に救いなし』

'21/02/21

聖書箇所: マルコの福音書 7 章 1-13 節 (新約 p.78-)

今回、このメッセージをするに当たって、ここ日本における死生観…、つまり、「あなたは、死後の世界を信じますか?」というようなアンケート結果¹を検索してみました。…すると、私の予想に反して、そのような統計を取るようになった、ここ 50 年ほどの傾向を見てみると、「死後の世界を信じる…」という意見が、“少しずつ”ではあっても増えていっている傾向にあるのだそうです。

確かに、オウム真理教の事件があった後は、「死後の世界」に関して否定的な意見が増えたようなのですが、それも 10-15 年ほどで回復して…、その後にも、その前の水準に戻っていった、その後は、また少しずつ、「死後の世界を信じる…」という人たちが増えていっているのだそうです。

そう言えば、私も、時々、ニュース番組などを見ていて、「あの亡くなった方は、天国へ行くだろう…」というようなコメントと言うか…、報道がなされているのを見て、違和感を覚えることがあります。…と言いますのは、ここ日本におきましては、「死後、自分は天国へ行けると思う…」という風に、ただ漠然と、何となく良いように思っておられる方が多いのではないのでしょうか?

しかし、神様からのお言葉である聖書は、そうは教えません! 福音について教えられてある、ローマ書によると、私たち人間は皆、生まれながら、神の怒りの下にあるわけで、本来なら、誰一人、天国に行けるようなご立派な存在ではありません。恐らく、皆さんも聞いたことがあるでしょう、「義人…、つまり、神様の目から見て、天国に行けるような…、それほど良い人間は居ない! 1人も居ない…」そう、聖書のみことばは教え…、また、警告をしてくれているからです。(ロ=マ1:18、3:10)

命題: 当時のパリサイ人たちが陥ってしまっていた問題とは?

今日、私たちは、今から約 2000 年前…、あのイエス・キリストの時代に生きていた、パリサイ人たちに目を向けていきます。彼らパリサイ人たちはまた、私たち日本人と同じように…、いえ、私たち以上に、「自分たちは良い人間だ! だから、自分たちは天国へ行けるに違いない…」そう思い込んでおりました。しかし、イエス・キリストは、彼らに何とおっしゃられたでしょう?

今日、私たちは、当時のパリサイ人たちがイエス様と交わされた会話を通して、その当時のパリサイ人たちが陥ってしまっていた問題について考える時を持ちたいと思います。…と言いますのは、当時のパリサイ人たちが持っていた誤解と言いますのは、現代の私たち日本人たちと相通する部分があるからです。そうすることによって、願わくは、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、イエス様が宣べ伝えてくださった救いの方法について、正しく知ることができて…、できれば、1人でも多くの方が、救い主イエス様のことを信じて、天国への切符をご自分のものとしてくださることを願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、マルコ伝 7:1-13 をお開きください。

I・パリサイ人たちの 誤解 ! (1-5 節)

まず、最初に、今回のみことばから私たちが学んでいきたいことは、この当時のパリサイ人たちが持っていた、「誤解」についてであります。さて、この当時のパリサイ人たちは、どのような誤解をしていたのでしょうか? どうぞ、今回のみことばの内、マルコ 7:1-5 をご覧ください。そこには、このように記されてあります。

1 さて、パリサイ人たちと幾人かの律法学者がエルサレムから来ていて、イエスの回りに集まった。

- 2 イエスの弟子のうちに、汚れた手で、すなわち洗わない手でパンを食べている者があるのを見て、
- 3 ——パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず、
- 4 また、市場から帰ったときには、からだをきよめてからでないで食事をしない。まだこのほかにも、杯、水差し、銅器を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある——
- 5 パリサイ人と律法学者たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」

●パリサイ人たちの 背景 にあつた教え

さて、ガリラヤ地方で活動しておられた、イエス様のところに、パリサイ人たちと幾人かの律法学者たちが、はるばる、エルサレムからやって来ます。…つまり、この当時は、それほど、イエス様のお名前が広く…、エルサレムや世間に知られていたということが分かります…。

さて、そんな時、イエス様の弟子が手を洗わないで、食事しているのを見かけて、パリサイ人たちが、イエス様に質問をします、「なぜ、あなたの弟子たちは、汚れた手でパンを食べるのですか?」って…。どうか、皆さん、誤解をしないでください。この時、パリサイ人たちが言ったのは、所謂、今のような…、新型コロナが流行しているからとかではなく、「宗教的な意味における汚れ」について指摘したのです。

でも、食事前に、手を洗わないからと言って、それが何なのでしょう? ⇒実は、そういったことのために、この福音書を書いてくれたマルコは、そういった質問を想定して…、ちゃんとした説明をしてくれています。それが、3-4 節のみことばです。

実は、この時代、パリサイ人だけでなく、ユダヤ人たちは皆…、しっかりと手を洗ってから、食事をしなければならぬ! という決まりがあつたのです。「しっかりと手を洗ってから、食事を…」…そう聞くと、皆さんは、「当たり前やん…」と思われるでしょうけれども、それがそうでもないのです…。

どうぞ、今日のみことばの 3 節に注目してくださいますか?…ここで、マルコは、『パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事をせず…』ということをお教えてくださっていますか?…そうなんです。この当時の者たちは皆、昔からの言い伝えを守って、様々な行動をしていたのです。

じゃあ、その昔からの言い伝えとは、具体的に言って、どのようなものなのでしょう? ⇒実は、この当時からさかのぼって、約 1400 年、あのモーセによって書き記された出エジプト記 30:11-21 に、こうあります、『11 【主】はモーセに告げて仰せられた。12 「あなたがイスラエル人の登録のため、人口調査をするとき、その登録にあたり、各人は自分自身の贖い金を【主】に納めなければならない。これは、彼らの登録によって、彼らにわざわいが起こらないためである。13 登録される者はみな、聖所のシェケルで半シェケルを払わなければならない。一シェケルは二十ゲラであつて、おのおの半シェケルを【主】への奉納物とする。14 二十歳、またそれ以上の者で登録される者はみな、【主】にこの奉納物を納めなければならない。15 あなたがた自身を贖うために、【主】に奉納物を納めるとき、富んだ者も半シェケルより多く払ってはならず、貧しい者もそれより少なく払ってはならない。16 イスラエル人から、贖いの銀を受け取ったなら、それは会見の天幕の用に当てる。これは、あなたがた自身の贖いのために、【主】の前で、イスラエル人のための記念となる。」17 【主】はまたモーセに告げて仰せられた。18 「洗いのための青銅の洗盤と青銅の台を作ったなら、それを会見の天幕と祭壇の間に置き、その中に水を入れよ。19 アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。20 彼らが会見の天幕に入るときには、水を浴びなければならない。彼らが死なないためである。また、彼らが、【主】への火によるささげ物を焼いて煙にする務めのために祭

¹ (宗教情報センターの研究員レポート) <https://www.circam.jp/reports/02/detail/id=5097>

壇に近づくときにも、21 その手、その足を洗う。彼らが死なないためである。これは、彼とその子孫の代々にわたる永遠のおきてである。』

⇒皆さん、分かってくださいました？…実は今読んだみことばの19節に、あのモーセの兄アロンと、その子どもたちが、手と足を洗うとか、彼らが死なないためである、というみことばがありましたでしょ。…もちろん、このみことばは、主なる神様が、モーセとアロンに命じられたみことばで…、彼らが、神様への御用のために、その身を清めなければならない！ということをお神様が教えてくださったわけなのですが、…でも、それだけなのです。

実は、ここだけでなく、出エジプト記40章にも、これとよく似た記事があって、そこでは、アロンとその息子たち…、つまりは、神に仕える祭司たちが、その身を洗って、身を清めるべきことが教えられてあります。しかし、聖書の中に、こういった教えがあることで、イエス様の時代の宗教家であったパリサイ人たちは、それらを拡大解釈して…、本来、祭司たちだけが守るべき教えを、一般の民衆たちにも守るよう教えて、それらを強制していたのです。

でも、それって問題ありません？…と言いますのは、聖書のみことばを与えてくださった側の、神様の意図は、それらの命令を、アロンやその子どもたちに対して語られたわけであって、それを、誰彼構わず…、別の者たちに対しても、適用するというのは、明らかに、神様の意図ではありません。そうでしょ？…でも、この時代のパリサイ人たちは、そういったことを平気でやってしまっていたのです。

●自分たちは、きよい！

あのモーセの時代から、約1400年も経っていたイエス様の時代には、そういったような間違っただ適用…、拡大解釈や行き過ぎた適用などで溢れかえっていました。その証拠に、どうぞ、皆さん、もう1度、今日のみことばに注目してみてくださいませ？⇒まずは、その3節に『昔の人たちの言い伝え…』という表現がありますでしょ？また、4節の最後、『…堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある』とあります。また、5節にも、先程の『昔の人たちの言い伝え…』という言い回しが使われてるように、彼らが一生懸命に教え…、また、守っていた教えは、単なる言い伝えやしきたり…、つまりは、“人間の教え”にしかならなかったのです…。

恐らく、そんな風なことを、この当時のパリサイ人たちに指摘したところで、「いやいや！ちゃんと聖書に書いてあるから！これは、神様のみことばだから！」と言い返されると思われませ。…でも、それこそが彼らの間違いだったのです！

実は、この当時、ユダヤ社会には、大きく分けて、2つの教え…、2つの“律法”がありました。まず、その1つは、“成文律法”(実際の文章に成っている律法と書く)とも言うべきもので…、言わば、はっきりと聖書のみことばに書かれてある様々な教えであります。それと、もう1つの律法は、“口伝(くでん)律法”と言うべきもので、先程の成文律法とは違って…、文章になっていなくて、口で代々伝えられた律法と言うか、実際に書き記された律法を解釈した教えであったりとか、日常生活を送るに当たって、歴代の教師たちが事細かく教えたもので、あります。これを今、私たちは「ミシュナー」と呼んでいます。

一体どうして、彼らユダヤ人たちは手洗いに関して、そんなにこだわったのでしょうか？⇒実は、それは、彼らユダヤ人たちの「選民意識」にありました。「自分たちは、あのアブラハムの子孫であって、唯一真の神様から特別に選ばれた選民であるが、異邦人たちは汚れている…」皆さん、分かってくださいます？「異邦人たちは汚れている…」それが、彼らを手洗いに走らせた大きな理由であったのです。

だって、ちょうど今、新型コロナウイルスが蔓延している現代でも、私たちは、食事をする前や帰宅してすぐに手を洗いますでしょ？…と言うのは、私たちの手や顔に、新型コロナウイルスが付いているかも知

れないからです…。しかし、この当時のユダヤ人たちの場合、食事の前に、手を洗ったのは、異邦人たちが触れたものに、自分たちが触れてしまっているかも知れないからです。それ以外、例えば、市場などに行きますと、そこには、異邦人たちが居て、そこで売られている品物やあちこちに、罪に汚れた異邦人たちが触れてしまったかも知れないからです。だから、彼らユダヤ人たちは皆、市場から帰った時に、手を洗ったり、体を清めたりしたのです。…そういったことの1番の理由は、異邦人たちが霊的に汚れていたからです。…だから、来週に学ぶ予定のマルコ7:14以降で、イエス様は、「私たちの外側にあるものが、私たちを汚すのではない！ 私たちの内側が…、つまり、私たちの心が罪によって汚れてしまっているのです…」という話をしてくださるわけですよ。

●自分たち(の行ない)は、立派である！

この当時のパリサイ人たちの問題について、イエス様が分かりやすく教えてくださった、最も有名な例え話がこれです。ルカ18:9-14、『9自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。10「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。11パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。12私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』13ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』14あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』

⇒このみことばは、ほとんどの方がご存知だと思います。いつも言いますように、この例え話は、イエス様による創作です。…と言うことは、つまり、この物語の設定をイエス様は自由に決めることができたのです。その上で、イエス様が教えてくださったのが、この例え話です。

この物語で紹介されてあるパリサイ人は、実在したというよりも、この当時の一般的なパリサイ人の姿であると考えべきです。当時のパリサイ人たちは、確かに、信仰熱心であったでしょう…、また、品行方正と言うか、所謂、素行の悪い人物でもなかったはずですよ。しかし、彼らには、大きく2つの問題がありました。

1つは、自分のことを義人だと“自任していた”…、つまり、「自分は正しい人間である」と勝手に思い込んでしまっていたことです。皆さんも、よくご存知のように、神様からのお言葉である聖書のローマ3:10には、『…義人はいない。ひとりもない。』ということをお教えてくれています。ここで言われている『義人』と言いますのは、ギリシャ語(δικαιος)で、「(本来は)神様の標準に合致しているような正しさ」を言います。つまり、天の神様から見ると…、その神様のお眼鏡に合うような…、心が完全に清く正しい人間は居ない！というのです。その証拠に、私たち人間の誰一人…、「ただの1度も、醜い思いや浅ましい考え…、淫らな欲望や自分勝手なことを考えたことが無い！」なんて者は居ないでしょ？…にも関わらず、当時のパリサイ人たちは、自分たちのことを、天の神様から見ても、「清く…、正しい人間である」と思い込んでしまっていたのです…。高慢でしょ？

それともう1つは、彼らパリサイ人たちが、他の人たちを見下していたからです。しかも、ここでイエス様が紹介されたパリサイ人は、わざわざ、取税人のことを選んで…、その取税人のことを見下しています。皆さんも、ご存知でしょ？…この当時の取税人たちと言いますのは、所謂、「ローマの手下」であり…、ユダヤ人たちからすると「裏切り者のような存在」でありました。言わば、町中から嫌われていたのです。そんな取税人のことを、パリサイ人たちは見下して…、バカにすると言うか、蔑んでいたのです。…果たして、彼らの、そのような行動や考えは、この聖書のみことばが教えている神様から喜ばれるようなものでしょう

か？…いいえ！全く、そうではありません！…と言いますのは、この聖書のみことばが教えてくれている、真の神様は、何者よりも慈悲深く…、愛と恵み…、また、赦しに満ちておられるような御方だからです。…そうでしょ？…しかし、そういったようなことが、この当時のパリサイ人たちには、全くと言って良いほど、分かっていなかったのです。

II・それに対する、イエス様からの 指摘 ! (6-13 節)

どうぞ、今度は、彼らパリサイ人たちに対して、イエス様が“指摘”された内容について見ていきましょう。…果たして、イエス様は、パリサイ人たちの間違いと言うか、問題に対して、どのように教えてくださったのでしょうか？どうぞ、今日のみことばの内、6-13 節をご覧ください。

- 6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。』
- 7 彼らが、わたしを拜んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』
- 8 あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」
- 9 また言われた。「あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神の戒めをないがしろにしたものです。」
- 10 モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をのしる者は死刑に処せられる』と言っています。
- 11 それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かって、私からあなたのために上げられる物は、コルバン(すなわち、ささげ物)になりました、と言えば、
- 12 その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。
- 13 こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のこぼを空文にしています。そして、これと同じようなことを、たくさんしているのです。」

●あなたたちの 心 が閉ざされている！

ここで、イエス様は、旧約時代、南王国(のユダ)で活躍した預言者イザヤが書いたみことばを引用しています。ここで、預言者イザヤが指摘しているように、その問題点は、彼らの口先と言うか、その行ないと、肝心の心がかかけ離れてしまっていたことです。確かに、ここ 7 節のみことばが教えるように、当時のユダヤ人たちは、表向きには、真の神様のことを拜んでいたでしょう。しかし、彼らの心は、神様の方に全く向いていなかったのです！

どうして、そんなことが言い得るのか？それは、彼らが、神様の教えをないがしろにしていたからです！ここで、イエス様が教えてくださった具体的な例は、『コルバン』…、つまり、神様への捧げ物に関する問題でありました。『コルバン』というのは、神様への捧げ物を意味するヘブル語(קרבן)の音訳であります。

皆さんもご存知のように、この聖書のみことばは、私たちが、自分の父や母を敬うべきことを命じています。ここ 10 節で、イエス様が紹介された『あなたの父と母を敬え！』という戒めは、あの十戒中、第5番目の教えであって、しかも、私たち人間に関する教えの中では、1番目に出てくる教えであって、多分、私たち人間関係の中で、1番に優先すべき教えだと思われまます。10 節の後半で、イエス様が紹介して下さっている『父や母をのしる者は死刑に処せられる』という教えは、出エジプト記 21 章のみことばであります。つまり、自分の父や母を愛し敬うということは、神様の次に優先すべき戒めであったのです。

しかし、当時のユダヤ人たちは、そのような、神様の教えを悪用してしまいました。…と言いますのは、普通、子どもたちには、自分たちの両親を養う義務がありますでしょ？…しかし、一部のユダヤ人たちは、

自分の親たちを養うべき義務があるのに…、それがイヤだからと言って、「お父さん、お母さんに使おうと思って取っておいたものは、神様への捧げ物として捧げてしまいました…」と言うと、それで、もう彼らは許されてしまったというのです。…おかしくないですか！

いえ…、そういったことがおかしいのは、当のユダヤ人たちからしても、百も承知でした。だから、罪深いのです！彼らユダヤ人たちだって、自分たちが勝手な理由を付けて、それで、自分たちの親を扶養する義務を逃れようとしていることを…、また、そういったことが、神様のみこころに沿っていないことは重々承知していました。だから、問題なのです。要は、彼らが、神様のみこころに従いたくなかったのです！

良いですか？皆さん。天の神様は、何もかも、すべてを御存知です。…それに対して、私たちは、言いつの天才です。アダムとエバが初めて罪を犯した時、彼らはすぐにその責任を他者に転嫁しようとした。そのように、私たちは、ありとあらゆる理由を付けて…、もっともらしい表現を使って、何とかして、自分自身のことを美化して…、正当化しようとする。でも、神様はすべて御存知です！…実に、そういったことを、ここで、イエス様は教えて下さっているのです。

いくら、彼らが聖書のみことばを学んで…、また、彼らが一見神様のみこころに従おうとしても、そういったことに、ほとんど意味がありません。…と言いますのは、1番肝心な彼らの心が、神の前に閉ざされてしまっているからです。

皆さん、覚えて下さっています？マタイ伝 13 章で、弟子たちが、イエス様に対して、「一体、どうして、群衆には例えて“だけ”お話しになるのですか？」と尋ねた時、イエス様は、何とおっしゃいました？⇒どうぞ、マタイ 13:13-15 をお聞きください。『13 わたしが彼らにたとえて話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。14 こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。『あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。15 この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』

⇒ここでも、イエス様は、預言者イザヤの言葉を引用しておられます。…一体、何が、ユダヤ人たちの問題であったのか？それは、彼らの心が閉ざされているからです！…言い換えれば、神様が、彼らの心を閉ざしておられるのではない！彼らの側で、自分たちの目を閉じてしまっているのです！神の真理を知りたくないのです！「本気で変わりたい」と思っていないのです！…違います？そこが問題なのです！

●あなたたちは、神の みことば と、人間の教えとを 混同 してしまっている！

どうぞ、今日のみことばの最後の部分と言うか、結論的な部分である、13 節をご覧ください。そこで、イエス様はこう教えて下さっています、『こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神のこぼを空文にしています。そして、これと同じようなことを、たくさんしているのです。』…って…。

⇒今日、紹介したコルバンの件は、ほんの一部です。要は、彼らの聖書解釈が間違っていたというのが1番の問題ではありません。何度も言いますように、彼らの心が問題であったのです。心が、神様に対して、閉ざされてしまっていたのが問題だったのです。だから、彼らは、ここでイエス様が指摘しておられるように、神様の“みことば”と、私たち人間の教えとを“混同”してしまっていたのです。

さて、そういったような問題は、この当時のパリサイ人たち…、あるいは、ユダヤ人だけの問題でしょうか？いいえ！そうではありません。…これまでに何度も言ってきましたように、現代にも、これとよく似た問題が起こっています。…と言いますのも、いくら 1000 年経とうと、あるいは、2000 年経とうと、私たち人間の心が…、私たちの罪の問題が基本的には何も変わっていないからです。私たちの心を…、あるいは、私たちが抱え続けている罪の問題を、本当の意味で完全に解決できるのは、全能なる真の神様だけで

す！あるいは、私たち人間には、決して、勝利できなかった罪や死に対して、勝利してくださったイエス様だけが、私たちの頑なな心を変えてくださり…、私たちの罪の問題を完全に解決できるのです。

毎度毎度、こういった時に話していますが、悲しいのは、同じキリスト教会として分類されているローマ・カトリックの教会です。何度も言いますように、彼らは、元々は、あの使徒ペテロが牧会をしていたローマの教会が源になっています。…なのに、彼らカトリックは、神様のみことばである聖書と、私たち人間による聖書解釈を同一視して…、同じような次元にまでも持って行ってしまいました…。まさしく、今日のみことばの13節で、イエス様が注意&警告してくださったのと同じようなことです。

もう、今日は時間の関係もあって、詳しくは言いませんが、一体、聖書のどこに？イエス様の母マリヤに罪が無かったとか、そのマリヤが天へ昇っていったとか、罪人たちが一時的に苦しみを受けるような煉獄なんていう教えがあるのでしょうか？もしも、私たちが罪を犯した分を、煉獄で苦しんで、それで、私たちの罪が清算できて、天へ行けるなら、神であられるイエス様が、この地上へ下って来てくださる必要も…、あるいは、私たちの罪を背負って、あの十字架にかかって死んでくださる必要性も無かったのです！そうでしょ！

私たちが持っている聖書の最後、黙示録22章(18-19節)には、こう警告されてあります、『18 私は、この書の預言のこぼを聞くすべての者にあかします。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。19 また、この預言の書のこぼを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。』

⇒いかがでしょう？…残念ながら、ローマ・カトリックが採用してしまっている様々な教理は、こういったみことばに反していないのでしょうか？あるいは、ローマ・カトリックが、神聖なものだと考えてしまっている教会会議やローマ教皇様は、本当に間違いを犯さないのでしょうか？⇒いいえ。私たち人間は皆、完全ではありません。それは、幾ら、信仰深いクリスチャンや教師たちが集まった会議であろうと、ローマ教皇様であろうと変わりありません。だから、私たちは、ここ黙示録のみことばが教えるように、如何なる教えも、如何なる人物の発言も、聖書のみことばと同等に考えてはならないのです。…そうでしょ？

<励ましの言葉>

しかし、現実問題として、私たちは、これと同じようなことをしてしまっています。…皆さん、先週と先々週に私たちが学んだみことばを覚えてくださっています？…先々週、私たちは、あの「5000 人の給食」という奇蹟から、あの奇蹟が、実は、イエス様が弟子たちに与えられたレッスンであったということ学びました。また、先週は、イエス様がガリラヤ湖の水の上を歩かれたという奇蹟を学びました。

良いですか？皆さん…、私たちがしっかりと覚えなといけないことは、私たちが信じ仕えている天の神様は、全知全能なる御方であって、決して、約束を破られないし、私やあなた…、つまり、イエス様を信じて変えられた者たちのことを、決して見捨てられない！ということです。

なのに、クリスチャンである私たちは…、日々、いろんなことで不安に押しつぶされそうになったり、絶望してしまったりしていませんか？…だって、イエス様は、こう教えてくださっているじゃないですか？ マタイ6章、『25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。28 なぜ着物のことで心配するのですか。

野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。31 そういっわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。32 こういっものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。』(マタイ 6:25-34)

⇒このように、私たちには、天の神様がついてくださっています。だから、私たちクリスチャンは何も怯えたり、心配したり、不安に駆られる必要は無いのです。唯一、私たちが心配すべきことは、私たちの行動や選択が、果たして、神様のみこころに合っているかどうか…、今日のみことばで言うなら、みことばの正しい解釈、正しい理解に沿っているかどうかです。

良いですか？皆さん。宗教は、所詮、宗教です。いくら、それが正しいものであろうと、私たちの心や罪に汚れてしまった私たちを清めることはできません。まして、私たちがこれまでに犯してきた罪の清算は一体どうやってすることができるのでしょうか？…だから、仏教であろうと、神道であろうと、あるいは、ヒンズー教であろうと、何を信じて、そこに、究極の解決や罪の赦しは無いのです！私たちが救われる、たった一つの方法は、私たちが唯一の救い主であられるイエス様を信じ、このイエス様にしっかりと繋がることだけです！

まあ、言えば、キリスト教だって、それが、私たちにとって、単なる宗教に過ぎないのなら、それもまた、私たちのことを救えません。…と言うのも、それが、本物の信仰…、つまり、その人の生き方やその人の人生そのものになっていないからです！私たちのことを罪から救ってくれる本物の宗教(&本物の信仰)は、同時に、私たちのことを間違いなく、変えてくれるものです！どうか、今日、このメッセージを聴いてくださった皆さんが、この聖書のみことばを通して、イエス・キリストを信じる、しっかりとした本物の信仰に行き着いてくださることを願います。そして、皆さんが、神様の与えてくださる平安の内に、残された人生を歩んでいってくださることを願います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。